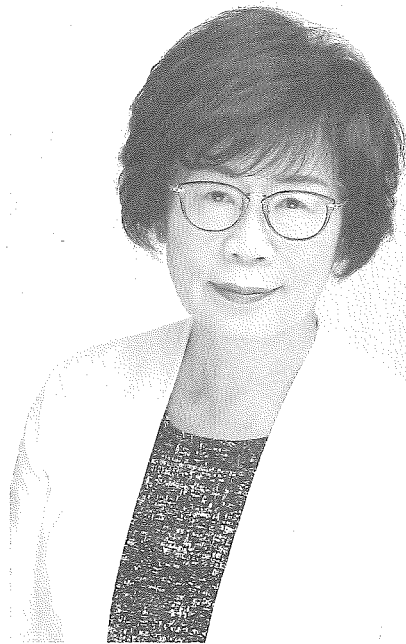


「子どもの安全を守る」

アメリカのルイジアナ州で起きた日本人留学生射殺事件（一九九二年）以降も、日本人の若者が事件に巻き込まれる例はあとを絶たない。子どもを帯同する場合も「ここは大丈夫」と呑気に構えていて、悲惨な結果に泣くことのないよう、海外仕様の危機管理術を知り、スイッチオンして出かける必要がある。

そこで、家族のための海外安全研究の草分けともいえる福永佳津子さんに、たんに「子連れ駐在では〇〇に気をつけよう」という話にとどまらず、幼児から若い世代にかけての若者の安全確保や安全教育について、話を聞いた。



福永佳津子 さん

海外生活カウンセラー／海外邦人安全協会 理事／NPO 国際人をめざす会副会長

上智大学卒。ニューヨーク在住6年、マンハッタンビルカレッジで修士号(MH)取得。ニューヨークWISH日本語電話相談室カウンセラー。帰国後は、海外生活カウンセラーとして講演・執筆が多数。著書・編書に『ある日海外赴任(ジャパントイムズ)』『海外安全ガイド(KDDクリエイティブ)』『アジアで暮らすとき困らない本(ジャパントイムズ)』など。2男2女の母。

出産直後から 子どもの危機管理が 始まる

危機管理といっても、未成年や子どもの場合、自分で危険を察知し、回避する行動を取るのは難しいですよ。

福永 もちろん、子どもを危機から救うのは、親の責務です。何が危ないことをか理解し、それを回避できる能力・体力が備わる年齢……少なくとも十二歳くらいまでは、親または親に代わる第三者が子どもを守らなくてはなりません。

—— 出産直後から子どもの危機管理が始まるわけですね。

福永 待ったなしです。日本ではあたりまえと思われることが、海外では「育児放棄」「幼児虐待」とみなされ、警察沙汰になりかねないと心しておく必要があります。

やっとな子どもが寝てくれたから、そつと家を抜け出して近くのスーパーに買い物に出かけたところ、戻ってきたらパトカーが家の前について、近所の奥さんたちが警官に大声で何やら叫んで

いる。警官がこちらに向かい「あなたは育児放棄をしましたね？ 児童虐待の疑いがあります。署まで同行を」と言われて……という例など、決して大げさな話ではありません。

スーパーの駐車場に停めた車の中に乳幼児だけ残して、「ちょっと買物へ」もアウトです。周りにいる人は、危険極まりない駐車場という場に危機回避能力のない乳幼児がひとり置き置かれていたことは、犯罪以外の何物でもないと考えます。目撃した人が急ぎ警察官に通報するのは、当然のアクションとなります。

—— 最近、日本でもマイカーの中で幼児が死ぬケースが報道されますが、「幼児虐待」として扱われることは、まずありませんね。

福永 日本で「はじめてのおつかい」というテレビ番組があります。子どもが親から頼まれた「おつかい」を健気（けんげい）にやり遂げようとがんばる姿が涙を誘っています。しかしその一方で、海外から見れば、年端も行かない子どもだけで買い物に出す行為は考えられない暴挙です。感動の番組も、海の方の親たちからすれば、「怖くて見てられない、とんでもない番組」となってしまうのです。

小学生までの

危機管理や

安全教育は？

—— 子どもの叱り方にも注意がいりますね？

福永 「昨日、パパにたたかれちゃった！」と先生に言ったがために、警察の事情聴取を受けることになった例もあります。北海道で山の中に子どもを置き去りにした「躰事件」がありました。父親は、お仕置きが目的だったとうなだれていましたが、幼い子の姿が置き去った場所から見えなくなってしまうことになりました。熊が出没する地区だったこともあり、さすがにこのときは、国内でも「熊に躰をさせるつもりだったのか？」といった厳しいコメントが言われました。安全面への配慮なしでは、躰と称する行為が虐待以外の何物でもなくなるといえます。

—— ベビーシッターを雇う感覚も面食らうのではないかと思うのですが。

福永 アメリカの現地校では、PTAの会合は夜開かれ、夫婦そろって出席が求められます。ご近所の夜のパーティーでも、夫婦そろって参加するのが

原則ですから、家を留守にする間は、子どもだけに任せず、かならず信頼できるベビーシッターを雇います。

時間帯にもよりますが一般的に十二歳まではシッターされる側に、十二歳を過ぎたらシッターをする側になるというのが暗黙のガイドラインでしょうか。子どもたちは大人のシッターさんより、年齢の近い近所のお兄さん・お姉さんが遊びに来てくれることを、ことのほか喜びます。彼らも、どうやって子どもたちを安全に守りきれいかを一生懸命考えてやってくれます。彼らはその歳までに親から「危ないことはどういうことか」「それから身を守るためには、どうしたらいいか」をたたき込まれているので、まさにその知恵を役立てる機会でもあるのです。

—— その十二歳ころまでに、何を教えるのでしょうか？

福永 いろいろありますが、たとえば誰かが自分が不快に感じることをしようとした場合に、きっぱり「NO!」と断ることを教えることも、一つです。次に、性的な言動に對して「水着で隠れる部分を誰かが触ったら、先生・親に言いなさい」とつねに言っておきます。こうした場合、子どもが言いだしやすいうように、わかりやすく教えておく必



要があります。

留守番ができる年齢になったとき、あるいはやむを得ず留守を子どもに任せる場合に、そのタイミングをねらって犯行が行われないよう、親の不在を告げない言い回しを覚えておかななくてはなりません。「電話口で『パパとママはいない』と言って子どもだけで留守番していることを明かしてはダメ！『パパとママは手が離せません』『パパかママにあとで電話してもらいます』と言いなさい」と教えます。我が家では、「外出先から戻ったときに『ただいま〜』と大きな声で家の中に向かって言う」とも教えていました。侵入犯がいた場合に鉢合わせしないようにする（犯人に逃げるチャンスを与える）知恵としてです。

—— 映画『ホームアロイン』のような……

福永 いい例ですね。子どもの危機管理を考えるうえで、バイブルともいえるべき必見の映画です。主人公は八歳の少年ですが、ひとりでいることを他人に悟られないための作戦や仕かけが見事で、痛快でした。

「自分の身は自分で守る」を教える

—— 中学・高校くらいになるとどう変わりますか？

福永 「自分の身は自分で守る」という確固たる気持ちを持ち、そのために必要な情報を得て、そのうえで周りに起こる危機に対してつねに「勘」を働かせ、回避対応するよう訓練を重ねていきます。

—— 海外では、「It's your own risk（何事も自分の責任で）」と突き放されることも多いですよ。

福永 まだ大人の支援が必要な年齢ですが、自分で考え判断する危機対応力を、より高める時期でもあります。誘惑も危険も格段に多くなり、「知らなかった」がために加害者扱いされたり、犯罪に加担させられていたりすることも起こり得ます。

高校の入り口には金属探知機が置かれ、銃やナイフなどの危険物を持ち込まないようチェックしていたり、移動の足（車）の確保がつねに最大のリスク管理事項になる地域も多いです。ま

た校内でも人種間・グループ間の対立感情が渦巻いていたり、些細なことで喧嘩が暴動に発展する危険性があったりして、制服警察官が常駐していることも珍しくありません。幼いころとは別の種類の危機に対して、うかつに巻き込まれない知恵と強い意志が求められます。

—— 日本の若者が海外で事故・災害に遭った場合、どういう状況になるかをマスコミではあまり取り上げませんがたとえば「九・一一（アメリカ同時多発テロ）」のとき、単身で現地にいる若者はどうだったのでしょうか？

福永 世界を震撼させた悲劇から、今年で十七年がたちます。同時多発テロは、すべての飛行機の発着をストップさせたために、帰国のめどが立たないなかで、若者たちはフライトの変更や宿の延泊交渉、予定外の出費の手当てに即座に対応することが求められました。しかし対応できるだけの英語力の準備がなく、コンタクト先の旅行会社との連絡先も知らず、まして頼るべき日本総領事館の所在にも無頓着で、右往左往する人がたくさんいました。

私も同宿していたドミトリー（学生向け簡易宿）にあった、たった一台の電話には、日本の親から子どもの安否を問う電話がひっきりなしにかかって

きて、受付嬢をあきれさせました。「ほかの国の親は、誰も電話をしてこないわ。家から送り出す前に、しっかりと危機管理を教えているからね」と言われて、身を縮めました。

万が一に備えて何を準備しておけばいいのかを知り、自分で事態を切り抜ける力を備えてこそ、安心して海外に出かけられると知るべきでしょう。

子どもの

「パニックの傷」にも

要注意

—— 海外に住む子どものメンタルヘルスについて、保護者はどうも無頓着になりやすいように感じます。

福永 そうですね。非常事態で混乱した事例に、一九九八年のジャカルタ騒乱による国外退去も挙げられると思います。国外退去の勧告が出され、数時間のうち取るものも取りあえず（荷物はスーツケースのみOK）空港に走り、熱帯の国から五月の故国に退避することになったという話も聞きました。事態が収まるまでの数カ月を慣れない（ジャカルタ生まれの子もいる）環境下で過ごしたあの騒乱事態は、子ども

にも少なからず精神的な影響を残したことでしょう。なによりも親の混乱にふり回され、事態を理解するにはあまりに幼い子もいて、突然の環境変化に戸惑いを覚えても不思議ではありません。

—— 親は「日本に帰ることができた！」で安心してたりしますけど。

福永 実際に自分たちが被災者や被害者になったわけではないものの、滞在国の混乱で、もぎ取られた気持ちを落ちさせられず不安定な時期を過ごしたことは容易に推察されます。家財も全部残したまま、ふたたびその地を踏み可能性があるやなしや……友達も知り合いもバラバラとなり、さよならのことばがけもままならなかったあの日のこと……子どもだけでなく、親にも相当な心理的圧迫があったはずです。

—— 直接身近に起きた事件・災害でなくても、大人がテレビのニュースに見入っている際に、子どもがそれを目にしてしまうこともありますね。

福永 子どもがテレビ画面を通してショックを受けることにも警戒が必要で、直接被害に遭う可能性よりも、被害現場の映像を通して見ってしまう可能性の方が、はるかに高いです。

たとえば「九・一一」の際に、現地の精神科医たちが、子どもに悲惨な映

像を見せないように、と訴えていましたし、実際、テレビのテロップでも、警告文が流れました。「三・一一（東北大震災）」の際も同様です。人が流され、家が壊れていくさまを繰り返し見ることは、子どもに残像として精神的負荷をかけてしまうことに、大人たちは気づくべきです。子どもたちがダンボールをビルに見立てて、おもちゃの飛行機をおつけて遊ぶ……ということが始まって、大人は慌てるのです。

日本人はねらわれやすいといわれ、「お金持ちで、多額の現金を持ち歩く」「クレジットカードや情報の管理が甘い」といった印象がひとり歩きしている。実際、安全な日本で育つために無警戒・無防備で、瞬時の防衛判断・動作はほかの国の人よりも不得手な向きも多いかもしいない。子どもまでが高額のスマホを持ち歩いていて、格好の標的となってもおかしくない。

幼いときから「自分の身は自分で守る」という確固たる気持ちは持たせ、危険回避の勘を養わせる、という福永さんの話は重い。目にした衝撃的なテレビ画面によって、「こころに傷を負う子どももいる。子どもの発するさまざまな信号、を見逃さず、早目に対応していきたい。」